くまもと

わたしたちの福祉

2007（平成19）年２月28日　第50号

留学生へのインタビュー風景

主な内容

留学生の見る日本・熊本の
　　福祉と社会、勉学と大学生活　２～５
時事寸評⑱ …… ６～７
わたしの研究㉟ …… ８～９
福祉見てある記㉟ …… 10～11
〈一冊の本〉 …… 12
家庭児童相談室の窓から …… 13
事務室だより
「情報誌第50号をむかえて」 …… 14

留学生の見る日本・熊本の福祉と社会、勉学と大学生活

守弘　仁志　　大野　哲夫

熊本学園大学に在籍する留学生は141人におよぶ。彼らは母国と比べて熊本のどのようなところにひかれたのだろうか。また彼らは学園大をどのように見ているのだろうか。さらには、日本や熊本の福祉の現状をどのようにとらえ、また社会福祉を学んでいる学生は講義やゼミからどのようなことを得ているだろうか。3人の留学生に聞いてみました。

○まず出身地・国と学科・学年を教えて下さい。

私（高）は中華人民共和国雲南省昆明（クンミン）の出身です。北京第二外国語学院日本語学部3年生で、現在、交換留学生として学園大学の経営学科で勉強しています。

☆ドラえもんと寅さんで育った

――― 学園大では主に何を勉強していますか。

日本語や異文化コミュニケーションなどの授業とゼミに出席しています。実は子どもの時に「ドラえもん」や「ドラゴンボール」などの日本のアニメに夢中になり、母の好きな「男はつらいよ」の寅さんの映画などを観て育ったので、日本に強い関心をもち、大学も北京第二外国語学院の日本語学部に進みました。日本語をもっと勉強して、出来れば将来、中国で日本語や日本文化を教える先生になりたいと考えています。

私は日本語を学びながら、中国の漢字と日本の漢字の違いに興味をもちました。現在、中国で使われている社会科学に関する語彙の60%～70%は日本語からきたものだと言われています。調べてみると、日本は西洋の科学文明を受け入れるときに、新しい言葉を独自に作り出し、柔軟に対応して近代化を進めたのに対し、中国はそれまでの重厚な歴史をもつ古典の語彙に置き換えていったため、いきづまり、現在は日本の和製漢語を取り入れたりしています。たとえば「社会学」「経済学」「体育」「広告」などいろいろあります。私は今、漢字を通して二つの世界を見ることを学んでおり、さらに日本文化をもっと勉強していきたいと考えています。

☆熊本城に感激

――― 学園大の印象・熊本の印象はどうですか。

熊本は東京と比べてもきれいで、ステキな街だと思います。緑が多く故郷の雲南とよく似ているので、とても親しみやすく、落ち着いている街だと思います。夏の旅行で北海道の松前城にも行きましたが、熊本城の立派さを思い出してしまいました。

学園大は建物もきれいで整っており、理想

的な勉強の環境だと思います。ただ、中国では大学でタバコを吸う学生は見かけませんので、食堂で食事しているときにタバコの煙が流れてくるのはたまりません。吸わないで欲しいと思います。（学内建物は4月から禁煙）

☆バリアフリーを知る

――― 学園大は建物をバリアフリーにしたり、学生さんが安心して勉学に励めるように環境や福祉に力を入れていますが、どのように感じていますか。

エレベーターに乗ると、高い位置と低い位置2カ所にエレベーター操作のボタンがあり、何故なのか分からなかったのですが、下にあるボタン表示は車イスなどのしょうがい者のために付いていると知って、びっくりしました。しょうがい者用のトイレにも感心しました。

中国の大学で「日本概況」という講義をとっており、そこで日本の4大公害を学び、水俣病について知りました。水俣には2回行きました。水俣病資料館にも行きました。ホームスティでとても親切にしていただき、海の幸（おいしい魚）と山の幸（豊富なサラダ）を食べました。みんなで舟をこぎ、レースをしたことが今では私の貴重な経験となっています。

☆親切なお店

――― もてなしの心（ホスピタリティ）を感じたりしますか。

電気製品はどれを買えばよいのか分からないとき、店員さんが製品についていろいろと、良い点、悪い点の両方を説明してくれるので、とても助かっています。店に入るときも出るときも、必ずあいさつがあるので、そのことを感じたりします。

○まず出身地・国と学科・学年を教えて下さい。

（周）私は中華人民共和国遼寧省撫順の出身です。社会福祉学部福祉環境学科3年生です。一般留学生として勉強しています。

（陶）私も中華人民共和国、山東省済寧の出身です。同じく社会福祉学部福祉環境学科3年生で、一般留学生です。

☆留学先の熊本のことは知っていた

――― 熊本学園大学に勉強しに来た理由、学部・学科を選んだ理由を教えてください。

（周）私の場合、祖父が日本、というか熊本にいて仕事をしているというのが大きいです。祖父がたまに中国に帰った時に、日本のいろいろなものをおみやげに持ってきて興味がわきました。特に小さな頃はおみやげの日本のマンガが楽しみでした。だから、留学する時、熊本に決めていました。熊本学園大学にしたのは社会福祉に興味があったからです。これから中国でも高齢化社会になってきて社会福祉は重視されるだろうなということを考えていました。また、多くの留学生仲間がビジネス系を選んだので仲間とは違う勉強をしてみようというのもありました。

（陶）私は、卒業した高校が崇城大学の附属高校と姉妹校で、高校時代の友人が熊本に行ったりして熊本のことを知る機会が多かったのが理由です。ただ自分の勉強からいうと文系なのですが、崇城大学は理工系なので熊本学園大を選びました。また、社会福祉学部にしたのは、これから中国でも高齢化が深刻になってくるだろうと思うのに、中国には福祉

に関する大学、学部がほとんどない、また熊本学園大の社会福祉学部は有名な先生も多く九州でも有数というイメージがあったからです。

☆施設が整っている学園大

――― 学園大の印象はどうですか。

（周）とにかく設備が整っていてきれい、というのがまずあります。それだけではなく先生がたもいろいろな教育用機材を使って授業に役に立てていますしね。また、私はパソコンを使うのが好きなのですが情報教育センターのパソコンは使いやすくてとても役に立っています。

（陶）大学の雰囲気がよいと思います。まず、学校の正門の並木道がきれいですね。また施設もよく整備されています。私がすごいと思うのは図書館です。建物が立派というだけでなく本も揃っているし、特に留学生としては中国の新聞、雑誌がかなり揃っているので週に何回か通ってたくさんの新聞や雑誌を読むことができるのが大きいですね。また、図書館ではＤＶＤの映画を見ることができるので、よく利用します。

（周）後はしょうがい者用のエレベーターやトイレがとてもいいと思います。こういう施設が使いやすいという機能だけでなく、見た目もファッショナブルなのに感心します。

（陶）福祉環境学科なのでバリアフリーは勉強の対象になるわけですが、大学の授業でも車いす体験で勉強しましたが、バリアフリーの意義がよくわかりました。それから大学の施設を車いすで体験して、ここはしょうがい者に勉強しやすい大学だということも感じました。それに比べると中国の大学は全く対応していないように見えます。中国の大学で多目的トイレがあるという話を聞いたことがありません。

（周）中国のしょうがい者は大学どころかまず、街に出ませんよね。不便なことがわかっているから。

☆バリアフリーや水俣の授業は将来役に立つだろう

――― 学園大でのあなたの研究・勉強でこれまでに得たものはありますか。

（陶）先に言いましたが、車いす体験など学科の科目に体験、見学のプログラムが組み込まれているのがよいと思います。留学生にとっては話を聞くだけよりも、見学したりする中で勉強する方が記憶に残りやすく、後の勉強につながりやすいという感じがします。後は水俣への一泊の研修も良かったです。移動して見学したり、少し遊んだりしながら勉強ができました。

（周）私もバリアフリーの体験学習には「驚いた」という印象が強いです。それまではバリアフリーの意義なんて考えたこともなかったわけですから。卒業して中国に帰ったら「バリアフリーは重要な問題だ」と広く言いたい。というか中国はしょうがい者問題だけでなく、一人っ子政策とその親という家族構成から高齢化の問題が必ず起こってくるだろうと思います。そうなった時に、今、熊本学園大社会福祉学部でしている福祉の勉強は広く役に立つだろうと思います。また、水俣病のようなケースもこれから中国で起こる可能性があると思います。そういう問題が起こらぬように皆に訴えるにも今の勉強は役に立ちます。

（陶）私も全くその通りだと思います。今やっている勉強が自分だけでなく皆の役に立つ勉強なんだと強く思います。

☆自然が豊かな熊本

――― それでは熊本の印象はどうですか。

（周）熊本の印象は東京より「発達」していないけど環境が良く、水がきれいです。勉強するには心を落ち着けられるような静かな環境が必要だから、本当に勉強するには良いところだと思います

（陶）二年前に東京、大阪に行きましたが、スピードが速くてついて行けませんでした。追い立てられるようで、息が苦しくなりました。勉強どころか生活もしたくありませんでした。その点、熊本は生活のスピードがゆっくりしていて、のんびりできます。生活するのに適当な感じで住みやすいです。

（周）本当に東京はリズムが早いですよね。ついてゆけない。ただ熊本に限らず日本は治安がよいと感じます。

（陶）確かに治安はよいですね。あとは熊本の人は親切ですね。道に迷ったら親切に教えてくれるし、場合によっては目的地まで連れて行ってくれることもあります。これは何回も経験があります。日本の若者については、「日本人は就職年齢が若い」という感じがします。

☆大学生に専門や学習成果を問う日本の企業――それはどういうところで？

（周）中国では大学を卒業していないと企業などからの求人がありません。だから22・3歳にならないと職がない場合が多いです。そして必要なのはランクの高い大学を卒業したという証明書です。大学で何を勉強したかということは問わない。それに比べると日本では個人の経験と能力を重んじていると思います。企業も大学生に大学の名前のみでなく「専門は何で、何を勉強したか」を問います。これは学生の能力をきちんと評価して採用していると思います。

――日本も昔は大学名が重要だったのですけれども、変わってきました。

（周）中国もこれからはそうなると思います。

（陶）確かに中国の企業では就職希望の大学生の学問的な専門をあまり聞きません。日本の若者で印象が強いのはファッションですね。今（11月末）とても寒いのに、学園大の同級生の女子学生がミニスカートなのには驚きます。「寒くないの？」と聞いたら「寒いよ」と言いつつ、ファッションのために我慢しています。留学生はそういうことはしません。実用的な服装が第一です。

☆進学して社会福祉の専門を生かした職業に――最後に、今後の進路の希望を聞かせてください。

（周）大学院に行きたいです。そして自分の能力を生かした仕事につきたいです。福祉の知識を生かしつつ日本と中国の通訳の仕事ができたらいいなと思ってます。空港の雰囲気が好きなので、空港を働き場所にしたいです。あとは発展途上国に行って医師の手助けをするような福祉的な仕事もいいと思います。

（陶）私も大学院に進学したいです。そのあと、中国に帰って、ボランティアを組織化するような仕事をしたいです。

今回、3人の中国からの留学生に、熊本や学園大学の印象や勉強の内容についてインタビューしてみました。それぞれ、将来の夢を抱きながら、熊本の地で勉学に励んでいる学生です。3人とも留学で熊本を選び、やってきた当初から地元の人たちにいろいろと親切にしてもらった体験を持っており、そのため熊本や学園大学に対してとても高い評価をしていました。また、学園大学のバリアフリーや熊本のユニバーサルデザインに配慮した街づくりにも感心し、とくに社会福祉学部の周くんと陶さんは、将来、学んだ福祉を活かした職業を強く目指していました。今回、留学生のこころに熊本での経験が確実に根づいていることを実感したインタビューでした。

（本学研究所研究員　守弘仁志
情報メディア論）

（本学研究所研究員　大野哲夫
社会心理学）